

# 沼津市 炭山坑内 記念館

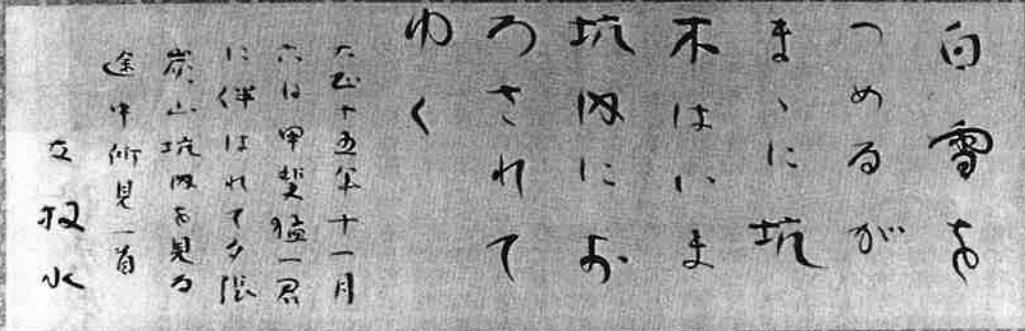
第三號

1989.12.1

編集・発行 社団法人 沼津牧水会

〒410 沼津市千本郷林1907-11

TEL (0559) 62-0424



## 夕張の歌

白雪をつめるがままに坑内はいま坑内におろされてゆく

大正十五年十一月六日 甲斐猛一君に伴はれて夕張炭山坑内を見る

途中所見一首 友 牧水

牧水が妻喜志子を伴って沼津駅から北海道へ旅立ったは大正十五年九月二十一日である。資金不足のため雑誌「詩歌時代」の廃刊を決めたが、残された借金返済の収入源としては、全国各地の門下知人を頼って半切色紙等の揮毫頒布に頼るほか無かった。途中、札幌、岩見沢で講演会や短歌会を催し、旭川では「心の花」の同人斉藤劉の官舎に泊まったりしている。斉藤は当時、陸軍大佐で第七師団の参謀長でもあった。こうして夕張町には十月三十一日に入っている。

夕張には当時延岡中学の同級生だった甲斐猛一が居た。甲斐は牧水とは尋常高等科時代からの級友で、東京遊学中も行き来していた仲である。(記念館に展示している「中学時代の成績表」には二人の名前が並んでいる)甲斐は当時、北海道炭鉱汽船株式会社夕張鉱業所の電気部長としてこの地に居住していたようである。

牧水の北海道揮毫旅行の夕張のくだりについては、「夕張歌壇史」(夕張歌人会発行)にかなり詳細な報告が見えるが、それには「いつからか(牧水と)本道歌人との間に感情的なもつれがあったようである」という記録も見られ、必ずしも快適とはいえなかった様子だ。したがって夕張の親しい旧友の家に宿泊した十日間は、牧水夫妻にとって、今度の北海道旅行中最もくつろいだ日々かと想像される。そう思っている顔装を眺めると、筆跡も伸び伸びとして屈託がなく、稀にみる美しさと言えるのである。

この横額は縦三尺に幅一尺の絹本を表装したもので、札幌在住の石岡昌子氏が、わざわざご自分の手で運んで来られ、記念館に納められたものである。もともとは牧水門下でも若かった沼津時代の桜井淑さんへ、晩年の師匠が手ずから与えた品だという。

(H)



夕張炭坑に入る牧水 (右は甲斐猛一)

## 特別寄稿

## 啄木臨終に駆けつけた牧水

藤岡武雄

「石川啄木君が今朝九時半に死にました、私は独りその臨終の枕もとに坐つてゐたのです」(明治四十五年四月十三日、喜志子宛牧水書簡)と報じているように、啄木の臨終に居合せた唯一人の友人が、若山牧水であったことは、この二人の交遊について語る上に忘れてはならない事実である。牧水が啄木の妻の連絡で、その臨終に駆けつけたのは、明治四十五年四月十三日の早朝のことで、牧水はそのときの様子を、「創作」大正三年一月号に掲げた思い出の中で、次のようにのべている。

「昨年の四月十三日の午前七時ごろ、私は車夫に起された。石川君の細君から同君の危篤が迫つたことを知らしてよこしたものであつた。すぐ駆けつけてみると、座に一人の若い男の人がゐた。あとで、その人が故人の竹馬の友金田一京助氏であることを知つた。病人は案外に安静であつた。(中略)金田一氏はこのぶんなら大丈夫だらうと、丁度時間も来たから私はこれから出勤するといつて帰つて行つた。それから何分もた、なかつたらう。

彼の容態はまた一変した。話しかけてゐた唇をそのまゝに、次第に腫がややしくなつて来た。私は惶て、細君を呼んだ、細君と、その時まで次の部屋から出て来なかつた同君の老父とが出て来た。とかくして私が危篤の電報を打ちに郵便局まで走つて、帰つて来てその昏睡状態は続いてゐた。細君たちは

口うつしに薬を注ぐやら、唇を濡らすやら、名を呼びやらしたが、甲斐あるやうにも思はれなかつた。(中略)老父は私を見ると、かたちを改めて、『もうとても駄目です。臨終のやうです』と言つた。そして、そばにあつた置時計を手にとつて、『九時半か』と呟くやうに言つた。時計は正に九時三十分であつた。」

この牧水の書いた思い出は、若くして逝いた詩人の唯一の臨終の記録である。

牧水と啄木を結ぶ機縁となつたのは、いうまでもなく雑誌「創作」である。啄木が「創作」に寄稿するようになったのは、明治四十三年五月発行の第三号に掲げた「手を眺めつつ」(短歌一六首)からで、四月下旬の啄木日記にも「若山牧水君から『創作』への歌を頼まれて送つた」と記載されている。

啄木はその後、五号に「自選歌」(短歌二三首、八号に「九月夜の不平」(短歌三四首、九号に「孩子の手ざわり」(短歌一六首)と評論「一利己主義者と友人との対話」翌四十四年には、第二巻一号に「方角」(短歌九首、二号に「都合わるき性格」(短歌二〇首、三号に「寝台の上より」(短歌一八首)を発表したほか、第二巻七号に「はてしなき議論の後」六篇の詩を発表している。

晩年の啄木がこうして多くの作品を牧水の「創作」に発表したのは、この新雑誌が明治末期における唯

一の詩歌総合雑誌として創刊されたことによるが、ひとつには啄木がこの「創作」に寄稿した縁で、その上、発行元の東雲堂書店から歌集『一握の砂』を出版し、こうしたことが機縁となつて牧水と親交を結んだためである。

啄木と牧水の最初の出逢いは、牧水のかいた「石川啄木君と僕」(「秀才文壇」大正元年九月)によると明治四十三年十一月頃、山本鼎・北原白秋・佐藤緑葉らと牧水が飲み歩き、浅草を田原町の方へ向つてぶらぶらしていたときに、はからずも向こうから啄木がやつてきて、かねて旧知の仲の佐藤緑葉に啄木





花柳 珠 (牧水を舞う)

を紹介され、挨拶したのが初対面にあたるのとべている。また牧水が啄木を訪ねたのは、明治四十四年二月三日のことで、この時啄木は日記にその印象を「夜、若山牧水君が初めて訪ねて来た。予は一種シニクな心を以て予の時世観を話した。声のさびたこの歌人は、『今は実際みんなお先真暗でござんすよ』と癖のある言葉で二度言った。」と書いている。さて、こうした啄木と牧水の交遊を考える上に忘れてはならない出来事が二つある。

その一は啄木が代表作の一つである「はてしなき議論の後」六篇の詩を「創作」明治四十四年七月号の巻頭に掲げていることである。いうまでもなくこの長詩は『呼子と口笛』の原型となったものであるが、それが「創作」の最終締切日である六月二十日前後に送られ、七月一日発行の「創作」の巻頭九頁にわたって掲げられている点から考えて、これは、啄木が牧水より巻頭作品を依頼されて作詩したものであることがわかるが、久しく二年にわたって詩作

をしなかつた啄木が突然「創作」のために「はてしなき議論の後」の絶唱を作っている事実は、記録されてよい。

その二は、啄木の第二歌集『悲しき玩具』をめぐる牧水の友情についてである。『悲しき玩具』の刊行が土岐哀果の尽力によってなされたことは広く知られているが、そのなかだちをしたのは牧水であった。それは彼の死去の直前である四月七日のことである。

啄木を見舞った牧水は、薬を買う金がない窮状を聞き、東雲堂から歌集の稿料を前渡しして貰うことを引受けた。しかしその頃「創作」の発行を中止して、東雲堂と気まずい関係にあった牧水は、土岐哀果を訪ねてその交遊を依頼した。牧水もこの間の事情について、前述の臨終の記に「私から土岐君に頼んで、土岐君が東雲堂からこしらえて行つた原稿料の札を何よりも先に彼は云つた」と述べ、牧水や哀果の奔走によって第二歌集の稿料二十円の入ったこ

とを啄木が苦しい息の中から、いかに喜んだかを報告している。

啄木臨終の日、その妻が金田一京助と共に牧水の自宅に迎えの車を走らせたのも、その住居が比較的近かつたというほか、こうした牧水との深い交遊によるのである。牧水はこの友の死をつぎのように歌っている。

初夏の曇りの底に桜咲き居りおとろへはてて君死ににけり  
君が娘は庭のかたへの八重桜散りしを拾ひうつともなし



〈ふじおか たけお〉

大正十五年山口県生れ、昭和二十二年山口師範学校を卒業、日本大学文学部国文学科を経て大学院を修了。  
現在日本大学文学部教授。著書「年譜齋藤茂吉伝」「評伝齋藤茂吉」など。

第三十六回 (十月二十九日)

沼津牧水祭・碑前祭・芝酒盛

前日の雨が上がりつつ風もない静かな秋晴れの日曜日、恒例の碑前祭が、今年も牧水二男の富士人氏を迎えて盛大におこなわれた。

林茂樹理事長の挨拶に続き、沼津市教育長杉田克

己氏は「西洋では偉大な芸術家の永眠の土地は、生誕の土地より大切にされている」という牧水の生地東郷町の高森町長の談話を引きながら、歌人が選び愛した我々の沼津を皆で大切にしようといさつ。若山富士人氏は献酒と献花のあと、「死後六十年のこんにち、盛大な祭典が催され、有難く存じます」と述べた。また、群馬県沼田市の文学愛好者を代表して献酒献花と教育長のメッセージの代読があり、そのあと、花柳稔師匠の踊り「牧水を踊る」(写真)が華麗に雅やかに披露され、参加者を感動させた。

# 新しい資料の公開・書簡

大正十四年五月十三日 沼津市千本濱より、  
長野市東町、池田彩雲様 急ぎ

(手紙・竹沢氏寄贈)

東京池の端心正堂といふより、紙絹などが貴兄宛に送られます、受取っておいて下さいまし、

当地の歌会が今日です、明日中津町にゆかねばならなくなり、明后九日中津発、同午后六時四十九分長野駅に着きます、誠に恐入りますが、駅に出ておいていただくといへん難有うございますが、いかがでせうか、

そして、駅前などに恰好な酒場でもありません、其處で万端の打合せをして、済んだらば約束のこと故、一晚梅子さんのお宅に厄介になり、翌十日早朝戸倉温泉へ参りたいと存じます、都合では九日の夜、すぐにそちらへ行つてもいいと考へております、そして、十三日また長野に参り、十四日が会、その夜あなた初め有志の人たちとゆつくりお話ししたいと思ひます、

中村君の松代をもあなたの方に合併する様な話で、さうしますと多少時間の餘裕が出来、それだけお逢ひしてゐる時間が長くなるといふわけです、その代わり十日から十三日までの揮毫には骨が折れる次才です、

なほ、九日、駅前にてお目にかかる節、今までに集まつてゐます申込の種類別、希望歌等其他、揮毫に要するすべての要件を悉皆用意して来ておいて下さいます、これは特にお願い致します、

お忙しさが眼に見えて、悉く恐縮してゐます、何

分ともよろしく願ひます、とりあへず御当用のみ、  
六月七日朝六時 若山牧水

池田彩雲様

別に認めませんが、妻よりも呉々よろしく申出でました、



大正十二年四月十六日、高島友次郎様

(手紙・高島明世氏委託)

高島君、先日は誠に意外でもあり、愉快でした、歌で知つてゐた通りの君を目の前に見得たよろこびは誠に深いものであります、

それから大変勝手がましいおねがひをしてすみませんでした、あの翌朝例の宿へゆきましたらもうちやんと届いてゐました、大騒ぎをして信州だの津軽だのへ幾つにも分けて送り出しました、恐らく彼等の見る最大の最鮮のものだらうと思ふと微笑まれます、お手紙通りにこゝに二円四十銭だけ入れておきます、そして別に何かお礼をしたいと思つてゐます、ほんとに難有うございました、妻よりも呉々よろしく申しました、

あれから来客が続き、用事も増し、忙しくて弱つてゐます、早く切りぬけて西伊豆週りに出かけたいためです、いづれ近にお訪ねします、とりあへず、  
十六日 牧水

高島友次郎様



大正十四年十二月十三日

大分県別府より、沼津市市道創作社

若山岬子様

(葉書・竹沢氏寄贈)

ちゃんみんなのちぢりよ、けふ、とんちんとかころんと、とても美しいちゃんのおべんべをおみやげに買ったぞよ、よろこべよろこべ。みちつべにも買ったといつてくれ。

沼津市若山牧水記念館・特別講座

第三土曜日の読書会

## 玉城徹先生と本を読む



東京大学文学部卒。著書「近代歌人の思想」「芭蕉の狂」など多数。現在、『毎日歌壇』選者。

本講座は牧水記念館会議室において、毎月第三土曜日の午後一時半より、次のテーマにて行ないます。参加費は一回千円(但し牧水会々員は無料)

第七回 12月16日 『柿本人麻呂という歌人』

第八回 1月20日 『夕暮・牧水の時代』

第九回 2月17日 『西行の読み方』

第十回 3月17日 『これからの短歌』